

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520599

研究課題名(和文) 遠隔性を持つタスクの言語切り替えに及ぼす効果

研究課題名(英文) The Effects of Task Remoteness on Code-switching

研究代表者

横山 吉樹 (Yokoyama, Yoshiki)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：70254711

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：予想に反して、言語切り替えが観測される場合が少なく、手続きの層においても、タスク間で量的な違いはみられなかった。これは、個人差要因がタスクの影響上回ってしまったためと考えられる。そのため、言語切り替えをよく行うスイッチャーとそうでないノンスイッチャーに区分し、それぞれの言語使用を再分析した。ノンスイッチャーは交互作用能力が高く、言語切り替えによるフレーミングの必要が少なくなる。また、会話方略をつまく使うことによって、言語切り替えをせずに修復をすることが多くなる。スムーズなターンテイクングによって、言語切り替えが多くなる手続きに関わる層に移行する必要性が少なくなっていたことが判明した。

研究成果の概要(英文)：This study, unlike the previous studies, has not observed many instances of code-switching. Even in the procedural-asides, the remote task did not produce more instances of code-switching than the non-remote task. The results were assumed to be caused by individual differences of the participants, which had a stronger impact on the language use than the task the participants were engaged in. The study then divided the participants into two types, switcher and non-switcher, and investigated their use of language. One of the findings was that the non-switchers had a good interactional competence, so that they could not rely on code-switching when they frame discourse. They were also good at making use of various types of strategies, so that they did not have to repair their utterances. Lastly when non-switchers got involved in turn-taking, it occurred very smoothly, so there was no need for them to shift into the procedural-asides.

研究分野：第2言語習得研究

キーワード：コードスイッチング タスク研究 第2言語習得

1. 研究開始当初の背景

社会言語学の分野では、バイリンガルの間でなされる言語切り替えに関する研究が行われ、場に依存するもの、言語機能に依存するものなどいくつかの種類に区分できることが報告されている。一方、学習者の言語切り替えに関する研究も行われているが、言語能力の欠如が原因であると片付けられることが多い。

最近の英語教育では、コミュニケーション能力の育成するために、学習者同士によるタスク活動を重視する傾向にある。そのような活動は、学習者が英語を用いる機会を増やし、自らの力で対話を創っていくという点において優れている。しかしながら、学習者のプロダクション活動は、教師の指導が作用しないことも多い。また、日本のような外国語として英語を教える環境では、英語のみを用いてコミュニケーションをするという本来の趣旨に反して、日本語に切り替えて話すこと（言語切り替え）も多々見られる。しかしながら、学習者の言語切り替えについての研究はほとんどなされていない。

2. 研究の目的

本研究は、英語教育のタスク研究であり、タスクの種類や特徴が、英語学習者の言語切り替えに与える影響を調査するものがある。先行研究により、学習者の言語切り替えには、2層分析という手法が有効であること、意思決定タスクは、そこで用いられる言語を複雑にする効果があり、手続きに関わる層で言語切り替えが増加することが観察された。一方、遠隔性という特徴をもつタスクも言語を複雑にすることが知られている。本研究は、遠隔性を持つタスクも、手続きに関わる層で言語切り替えを増加させるという仮説を検証する。これにより、タスクの特徴と言語切り替えの関係が解明され、英語教師のタスク学習の設計に貢献する。

3. 研究の方法

日本人大学生を対象にして、実験を行う。実験後にトランスクリプトを作成し、分析する。分析は、タスクをする上で必須な要素と手続き的な要素の2つの層に分けて区分し、それぞれに含まれる第一言語と第二言語を集計する。量的な分析として、タスク間と層間において、言語切り替えに有意な差があるかを調べる。また、質的な観点から、遠隔性のあるタスクを行う際に、どのように言語を切り替えながら、修復やタスクのやり方に関するやりとりを行うのかを調べる。また、遠隔性のないタスクの場合と比較し、その違いを明らかにする。

タスクの作成

本研究では、タスクにおける遠隔性を、タスクに含まれる要素 (elements)、説明する必要性 (reasoning demand)、親密性 (familiarity) から構成されるとし (Egusa & Yokoyama, 2003)、その要素が異なる2つのタスクを作成した。UFO タスクは、すべての要素を欠くため遠隔性が低く、Wonder Girl はすべての要素を持っているため、遠隔性が高くなるように設定した (表1)。

表1

タスクの特徴

	many elements	reasoning demands	familiarity
UFO	-	-	-
Wonder Girl	+	+	+

トランスクリプトの作成とその分析

その後、録音されている会話からトランスクリプトを作成する。それに基づいて、次の分析手順を踏む。

- 1 発話は、AS-unit に区分する。これによって、タスク間や層間の発話量の変化を調べることができる。
- 2 発話を次の2層に分類する (Yokoyama,

2009)。

タスクの手続きに関わる層 (procedural-asides) には、

・一連の構成があるものとして: repair sequence(self-initiation, other-initiation, self-repair, other-repair, response), meta-task sequence (sequencing, confirming the order)

・機能的に使われるものとして: discourse marker, self-questioning, private speech, asking for help, evaluation)

タスクをする上で必須な層 (task-essentials) には、

・ numbering, sequencing, description, information request, agreement (disagreement), confirmation といったタスクをやり遂げるために必ず用いなくてはいけない機能を含む。

3 会話全てが上記のように分類された後で、さらに第一言語と第二言語に区分して集計する。

4. 研究成果

表 2

タスクをする上で必須な層における記述統計

	UFO			Wonder Girl		
	L1	AS-unit	L1 ratio	L1	AS-unit	L1 ratio
M	0.1	73.9	0.00%	0.1	93.9	0.00%
SD	0.4	12.2	0.00	0.3	18.07	0.00

結果は、タスクをする上で必要な層では、どちらのタスクにおいても言語切り替えがあまり行われなかったが、手続きに関わる層においては、言語切り替えが多少増加していることが見られた(表2)。この点は、従来の研究と同様な結果となった。しかしながら、予想に反して、言語切り替えがあまり観測さ

れず、さらに、遠隔性のあるタスクとないタスクの間で、顕著な違いが見られなかった(表3)。

表 3

手続きにかかわる層における記述統計

	UFO			Wonder Girl		
	L1	AS-unit	L1 ratio	L1	AS-unit	L1 ratio
M	1.3	73.9	0.02%	1.3	93.9	0.011%
SD	1.7	12.3	0.03	1.4	18.1	0.02

この理由は、タスクの特徴ではなくて、学習者の個人差が大きな影響を与えているものと考えられる。そのため、被験者を、言語切り替えを多用するもの(スイッチャー)とそうでないもの(ノンスイッチャー)に区分し、その会話を質的に考察した。

スイッチャーは、修復のシーケンスに入る前に第1言語(Excerpt 1にある *ey:tou::*)に切り替えて、修復が続くことを明示した後に、自己修正を行うことが多いが、一方、ノンスイッチャーではそのような言語切り替えは修復の前では観測されなかった(Excerpt 2)。

Excerpt 1 (Switcher)

Ikuya: *ey:tou::* (well) there are umm there are an old couple.

注 斜字は日本語が発話され、: は母音が伸ばされて発音されたことを示す。

Excerpt 2 (Non-switcher)

Moe: Next, picture B. he and she older, (0.8) old man and woman in a car and old man is driving and next seat, in the next seat, in the next seat, set by her.

また、スイッチャーは、確認要求(Excerpt3にある *terasu*)などを言語切り替えてするこ

とが多いが、ノンスイッチャーは言語を切り替えずにしている (Excerpt 4)。

Excerpt 3 (Switcher)

Ikuya: UFO fly car light

Aya: *terasu*: :? (cast its lights on the=
=car?)

Ikuya: umm

Excerpt 4 (Nonswitcher)

Kai: alien jumping?

Aya: on the car.

また、Excerpt 5 で示されるように、ノンスイッチャー同士の場合、お互いのかけ合いがよく、ターンテイクが遅滞なく運んでいる様子がよくみてとれる (ターン間でオーバーラップがない)。これは、互いにターンがどこで終了するのかを見極めが早く、相手のターンが終了次第、自分のターンを始めるようにしている。さらに、確認要求などに対しても即座に答え、相手にとってタスクを遂行するのに必要な情報を与えるなどが行われている。

Excerpt 5 (Nonswitcher)

Haruka: picture A?

Kai: picture A? Debbie and John is=
= standing in front of the door

Haruka: normal door?

Kai: it is bad man 's door and couple=
=and bad man surprised each other

Haruka: Debbie and John are stand in=
=front of the door= =where is=
=the man

Haruka: In the house?

Kai: in the house

ノンスイッチャーは、このように、会話をする上での合意が暗黙で形成されている。そ

のため、次にすべきことの明示の必要性がないため、遅滞なタスクを遂行することができる。一方、スイッチャーの方は、目標への理解が希薄であり、そのため、次にすべきことを確認する必要性や明示する (フレーミング) 必要性となることが多い。

Misa: and picture D is er:: while two
people driving a car, they= =saw,
thy saw a UFO

Ryo: I think maybe picture A is the first.

Misa: *umm umm B janai nokana*::?(*umm umm
isn ' that Picture B?*)

Ryo: maybe next is my picture D

第2言語学習者の場合は、会話をどのように構成するのかが個人によって異なる。その差が、言語切り替えの頻度にも影響を与える。ノンスイッチャーは相互作用能力 (Wong & Waring, 2010) が高い。そのため、言語切り替えというリソースを用いて会話を構成する必要性があまりない。会話構成の仕方が熟達すると、言語切り替えを用いて、次にすることを明示する (言語切り替えによるフレーミングの) 必要が少なくなる。また、会話方略をうまく使うことによって、言語切り替えをせずに修復をすることが多くなる (elicitation など使用)。さらに、円滑なターンテイクによって、procedural-asides に移行する必要性が少なくなる。

これまでは、第2言語学習は、言語能力に重きを置いて考察されることが多かった。しかしながら、相互作用能力もその重要な要素であり、本研究が明らかにしたように、第2言語学習者の特質である言語切り替えに大きく関わっていると言える。

<引用文献>

Egusa, C. & Y. Yokoyama. (2004). The Effects of Task Types on Second Language Speech Production among Japanese University Students: Fluency, Accuracy, Complexity, and Trade-off Effects. *ARELE 15*, 129-138

Yokoyama, Y. (2009). EFL Learners' Code-switching Strategies in Communication Tasks. Unpublished doctoral dissertation. Sapporo, Hokkaido: Hokkaido University

Wong, J. & Waring, H.Z. (2010). Conversation analysis and second language: A guide for ESL/EFL teachers. New York, NY: Routledge.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

志村昭暢, 山下純一, 臼田悦之, 横山吉樹, 萬谷隆一, 中村洋, 竹内典彦, 河上昌志, 小学校外国語活動教材と中学校英語教科書のコミュニケーション活動の比較 タスク性と動機づけを高める要素を中心に, *JES Journal*, 査読有, 15巻, 2014, 111-124

臼田悦之, 志村昭暢, 横山吉樹, 中村洋, 山下純一, 竹内典彦, 河上昌志, 白鳥亜矢子, コミュニケーション活動のタスク性分析—学習指導要領改訂後の中学校教科書を比較した場合—, *HELES Journal*, 査読有, 13巻, 2014, 3-20

臼田悦之, 志村昭暢, 横山吉樹, 中村洋, 山下純一, 竹内典彦, 河上昌志, スピーキング活動のタスク性調査 - 中学校新旧教科書を比較した場合, *HELES Journal*, 査読有, 12巻, 2012, 21-36

[学会発表](計3件)

横山吉樹, タスクの遠隔性が言語切り

替えに及ぼす影響, 第40回全国英語教育学会 徳島研究大会, 徳島市, 2014年8月9日
山下純一, 志村昭暢, 萬谷隆一, 臼田悦之, 横山吉樹, 竹内典彦, 中村洋, 河上昌志, 小学校外国語活動教科書と中学校教科書のタスク性から見たコミュニケーション活動の比較, 第14回小学校英語教育学会神奈川大会, 横浜市, 2014年7月26日

臼田悦之, 志村昭暢, 横山吉樹, 中村洋, 山下純一, 竹内典彦, 河上昌志, 中学校教科書におけるスピーキング活動のタスク性の調査 - 新旧教科書の比較, 第38回全国英語教育学会愛知研究大会, 名古屋市, 2012年8月8日

[図書](計2件)

Yoshiki YOKOYAMA, Language Learners' Code-switching Strategies in English as a Foreign Language, Kinseido, 2014, 145

横山吉樹, 大塚謙二, 明治図書, 英語教師のためのフォーカス・オン・フォーム入門 成功するタスク&帯活動, 2013, 128

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横山吉樹 (YOKOYAMA, Yoshiki)

北海道教育大学札幌校・教授

研究者番号: 70254711

(2) 研究分担者

なし

研究者番号:

(3) 連携研究者

なし